Ｆａｔｅ～孤独な魂の旋律～

彩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ～孤独な魂の旋律～

【Ｎコード】
Ｎ８１６４Ｔ

【作者名】
彩音

【あらすじ】
数多ある星の一つ、“ティルマ”
魔法などの神秘的な力が溢れるこの世界は、神子と呼ばれる少女に支えられる世界だった。
少女の力により長く平和だった世界。
しかし、それはある出来事により一瞬にして崩壊してしまった。
そして、少女の行方も知れぬ間に、約７００年の月日が流れたある

日、ある一人の青年により止まっていた少女の時が動き出す――…。

欲望や嘘が渦巻く世界の果てで少女が見つけた、真実の姿とは――？

書き初め：　２０１１，１，２６

※この作品は、別のサイトで執筆しているものです。そのサイトで執筆次第、順次更新していく予定です。

プロローグ

――そこは、まるで崩壊後の世界のようだった。

無造作に散らばっている瓦礫からは、かつては栄えていただろう都市の片鱗も見ることができない。
生き物の気配もしない、無機質な灰色の世界。

しかし、その世界の中、唯一動くものがあった。
そのもの――その少女を中心に、半径２ｍほどの範囲では何もなかったかのような綺麗な地面が存在している。
崩れ落ちた外の瓦礫の世界とは、まるで別の世界のように……ただ、静かに時が流れていた。

そんな中、少女は無表情のままじっと天を見つめる。

重たい雲が重なり、薄暗くなっていく世界。そんな静寂な世界に、風が吹く音だけがその場に虚しく響く。

その風によってなびく銀色の長い髪が、少女の頬を撫でていると、少ししてからポツリ…と小さな雫の感触を鼻先に感じる。
それは、まるでこの世界の現状を嘆き悲しんでいるかのように、時を経るごとに大きく、そして激しくなっていく。
少女は、それによって湿り冷たくなっていく身体には目もくれず、ただただ天を見つめる。

その顔は、先程と変わらず無表情ではあるが、瞳の端には雨とは別の雫が静かに零れ、頬に一筋の軌跡を作っていた。

しばらくして少女は静かに立ち上がると、うっすらと自嘲の笑みを漏らしながらフラフラと足を進めた。

そして2，3分後にはその姿は雨の中に消え、その場を再び静寂な空気が襲う。

その日その場に降り注いだ雨は、世界中に広がり止むこともなく永遠と降り続いていた……。

動き出す“時”

「――ここが、“始まりの森”――別名、“聖地”……」

青々とした木々が連なる森の入口に、その青年はいた。
少し長い、艶やかな青髪が目に掛かるのをうっとうしそうに顔を歪めながら、目の前に広がる雄大な木々を見つめていた。

“始まりの森”――――または“原初の森”と呼ばれるこの森は、昼夜問わず神聖な光に包まれている。

約七百年前、この世界は一度滅び、その時この地に突然緑が生え始め、わずか何日かで今のような立派な森へと成長したと言われている。
そして、この森から放たれる光の粒により、森の近くから段々と緑が育ち出しそれから半年後にはほぼ世界全土が緑で覆われることとなったらしい。その緑のおかげで、わずかに生き残った人々は生活できて今のような文明を築けていけたと言われている。

このことから、“新しい世界の全ての源、つまり始まりである森”よって、“始まりの森”または“原初の森”と呼ばれている。
また、今だ発っせられている光には、緑を育んだと言われている“創造”の力と、汚れたものを浄化し時には怪我まで癒し直してくれるという“浄化”と“癒し”の力が備わっている。

このことから、一部では“聖地”とも呼ばれている。

その青年は、初めて瞳に映したその静かにも神々しい森の姿に、釘付けになっていた。
そして、暫時観賞した後、用を思い出した青年は少し慌てて足を前へと一歩踏み出した。

「中は至って普通だな…」

ガサガサと音をたてながら、無造作に四方から伸びる枝を避ける。
青年は、注意深く辺りを見渡しつつも思っていたよりも安全そうな森の様子に拍子抜けしていた。

この様子なら、無事に到達できそうだな…。

と、そこまで考えた青年は、少し進んだある地点に差し掛かり、それが自身の思い違いだったことに気づいた。

「ここは……」

そこは、一見何の変哲もない森の中。
しかし、所々の木々に赤色の印がつけられ、それが緩やかな曲線を描いていた。

青年は、その木々を見渡し、この森へ向かう前に言われたことを思い出していた。
そして、緊張した趣で、その木々の向こ側へと一歩を踏み出した。

「マジかよ……」

目をつぶり、やがて来るであろう衝撃を覚悟して、足を進めた青年だったが、それは杞憂に終わった。
呆然と、今いる場所とさっきまで自分がいた場所を交互に見つめる。

本当に通れるとはな……。
あの仮説は間違ってなかったということか…。
ならば、ここからは――――…。

スッと冷汗をかく。

『未知の領域』
――――そんな言葉が、青年の頭を過ぎった。

未知な物への好奇心と恐怖感を感じつつ、そろそろと足を進めた。
すると、木々の周りを漂っていた、淡い光の粒の量が段々と増え、何か神々しい気配に近付いていくのを感じ、更に緊張の色が強くなる。

強くなる気配に冷汗をかきつつ、一歩一歩踏み締めて歩く。
しばらくして、フッと視界が開けるとともに光が強くなり、視界いっぱいに光が溢れ出した。

「なっ……！？」

そして、目が光に慣れ、ぼんやりと開けていった視界に驚愕する。

光の発生元である少し開けた場所には、予想だにしなかった光景が広がっていた。
その光の中心には、ゆうに二、三mは有りそうな淡い水色の宝石のようなものが浮かんでおり、その中に長い銀髪を乱しながら固まっている少女が無表情で浮かんでいた。

「これは……」

いったいどういうことなのだろうか――？

ある程度のことは覚悟していたつもりだった。何といったって、自分が向かう場所は、いまだ誰も踏み入れたことのない、未知の領域。おそらく自分の知らない不思議が広がっているのだろうと、そう覚悟していたのだが――その想像以上のものに、しばらくの間開いた口が塞がらなかった。

少し経ち落ち着いてくると、未知なるものへの好奇心に駆られ、そろそろとその中心へと近付いていった。

真下から見たその姿は、離れた場所で見たよりも神々しい美しさを兼ね備えており、思わず見惚れてしまった。
今もなお放出されている光の粒が、無表情ながらも美しい、その容姿を際立たせている。

そんな様子に暫時見とれていたが、ふとある疑問が頭を過ぎった。

――この少女は、生きているのだろうか――？

その身体から出される光からは、強い生命の輝きを感じるが、その発生元である少女はまるで死人のように、生き物の息吹は感じ取れない。
それどころか、本当の死人のように肌は青白く、今にも倒れそうな様子である。

せめて少女を閉じ込めている、この宝石さえなければ――…。

そう思い、そっとその宝石に手を伸ばすと、数秒後、触れた部分がピシッと小さな音をたて、そこにわずかな亀裂が生じていた。ギョッとしてその部分を凝視すると、さらにピシピシと音をたてて亀裂が広がり、最終的にパリンッと粉々に砕け散ってしまった。

反射的に、飛び散った破片から身を守ろうと後ろに跳んだが、その破片が地面に触れる前にキラキラと輝き、空気に同化するように溶け込み消えていく様子に、その必要がなかったことに気づかされた。そして、破片が全て少女から離れ落ちていくと、少女の周りを纏っていた光の粒が、フッと消えると同時に浮かんでいた少女の身体から力が抜け、そのまま地面へ吸い込まれるように真っ逆さまに落ちていった。

その姿を確認した俺は、とっさに地面を強く蹴り、思いっ切り腕を伸ばしてその落下地点へと勢いよく滑り込んだ。

「っ…――！！……ったく、危ねぇ…」

飛び込んだ後、自身の腕の中にある存在を認め、ホッと安堵する。怪我はないかと確認したが、傷一つなく、うっすらと微かに感じる呼吸音にさらに力が抜けるのを感じた。

「……いろいろと確認したいことがあるんだが――――さて、どうすることかな……」

今だ目覚めの兆しを見せない少女を見つめ、混乱中の頭を抱えながら、これからのことに思いを馳せていた。

覚醒　†少女の目覚め†

『君は、自由…に、生…きて……？』

そう言って、紅の中、はかなく散ったあなたの笑顔が、今でも忘れられない…。

ねぇ、あなたは――――私と出会わなければ、今でも幸せに暮らせたのかな……？

＊　＊　＊

「んっ……」

瞼に感じた暖かな日差しに、そっと目を開ける。
そして、徐々に動き出した思考に、サッと血の気が引く。

ここは…？
私…は――――…！？

私は勢いよく起き上がると、素早く周りの状況を確認した。
そこは、質素な部屋の中だった。所々の壁紙が汚れ、長く使用されていたことが窺える。
そんな全くもって見覚えのない光景に、私は混乱していた。

ここはどこなの――？
私は……、私は、どうして……？
どうして動けるの――…！？
あの時、ちゃんと封印したはずなのに……！！
何故――――…！！？

顔を歪めながら、自問を続けていると、ガチャッというドアが開く音が部屋に響いた。

「おっ……？やっと目が覚めたか？」

その声に、ハッとそちらに目を向ける。

「なっ……！？人間…！！？」

生き残りがいたのか――？
そう思い、まじまじと目の前の存在を見つめた。

青く、艶やかに肩下まで流れる髪。それよりも深く濃い瞳。かなり顔は整っている。
年齢は２０代前半というところだろうか。
身長も高く、全体的にスラッとしていて、無駄な筋肉のない理想的な体型をしていると言える。

と、冷静に考察していると、少女は青年が眉をひそめ、怪訝な顔をしていたのに気づいた。

「“人間”……？
…まるで、自分がそうではないような言い方をするなぁ？」

探るような、鋭い視線が容赦なく突き刺さる。その視線に、私は冷え冷えとした目を向け、ゆっくりと口を開いた。

「――無礼者。
それは、私を“神子”と知っての愚行か。口を慎め」

無感情そうに、しかし威圧的に発せられた言葉に、青年は暫時目を見開いていたが、すぐに目を細めるとニヤリと口角を上げた。

「“神子”……ねぇ。
もしかして、それは彼の有名な“聖奏の神子”のことか？」
「“聖奏の神子”…？
なんだそれは。そんなものは、聞いたこともない」
「聞いたことがない…？そんな馬鹿な。あのお方を知らない者なんて、いるはずがないだろ？」
少し小馬鹿にしたような態度に、少女はさらに冷たい視線を向けた。
「……そのような者、今はどうでもよい。
それより、人間。ここはどこだ？私は、なぜ動けているのだ…？――しっかりと、封印をしていたはずなんだが……。
――何か知っていることがあるなら話せ、人間よ」
静かに、しかし確かな怒りを混じえた声に、青年は思わず身震いする。
そのはかない容姿からは想像出来ないような鋭く冷ややかな視線に、青年は息を呑んでいたが、早く話せ、とでも言うようにさらに険しくなった視線に、本能的に言葉を発していた。
「…確かに、俺が君を見つけた時は、君は何か鉱石の中に封印されているようだった。しかし、触れると同時にそれが割れて君が倒れ

たんだ。
だから、仕方なく俺の宿に連れてきたんだ」

青年の口から語られた話に、少女は怪訝な表情を浮かべた。

触れると同時に割れた――…？
そんな馬鹿な。…あれは、そんなやわなものではない。人間が解けれるような封印ではないのだ。
――それに、あの封印から一定の範囲内には、不可視の魔法と何人も立ち入れないようにする確固たる魔法をかけていた。だから、元々私の元へたどり着くことは不可能であるのだ。
……そう、“人間”であるのなら…。

「……貴様は、ただの人間ではないな？
―まあ、人間自体生き残りがいたことには驚いたが…、生き残りはお前だけか？
…普通の人間は生きていないだろうが……。
……どうした？――私を、殺しにでも来たのか？」

静寂の中、少女はニヒルな笑みを浮かべた。

その少女の笑みに、青年は背筋が寒くなるのを感じた。が、少女の言葉に一つの仮説が正しかったことが証明されたこと、また歴史の生き証人に出会えたことに対する感情の高ぶりを止めることが出来なかった。

「…俺は、君をどうこうするつもりはない。
だが、無断で君を連れて来たことも事実。だから、出来るだけ君の質問には答えよう。
……その前に、いくつか確認したいことがある。
……君が言っている“人間が生きているはずがない”というのは、世界が一度滅びたから、か…？」

慎重に、少女の様子を伺いながら口を開く青年。
その青年の言葉に、少女は一瞬顔を険しくさせるが、すぐに元の無感情な顔へと戻した。

「そうだ…。…私の記憶が正しければ、あの時、生物の生存反応はなかったはずだ。
なのに、なぜ生きているのだ…？」

「—その言い方では、やはりあれを知っている、ということなのか…」

「…質問に答えろ」

「…分かったから、その殺気を抑えてくれ」

冷や汗を感じながら、青年は少し納まった殺気にホッと息をつく。
そして、真剣な表情になり口を開いた。

「なぜ、生きているかだったな？
……もちろん、生き残りがいたからだ」

「そんなはずは……！」

「まあ、待て。…君と俺とでは、少し話に食い違いがあるようだ。
このまま言い合っていても、埒が明かない。
――ひとまず、俺の話を聞いてくれないか？
その話を聞いた上で質問してくれ」

青年の言葉に眉をひそめる少女だったが、渋々納得したのか不機嫌なまま黙っていた。
文句が出なかったことに内心ホッとしながら、青年は再び口を開いた。

覚醒　†歴史†

「昔々――、この世界が神に創られてから、数千年が経った頃――この世界は人間同士の争いが絶えず、自然は枯れ、戦いにより生み出された“負”が世界中に蔓延し、滅びる寸前まで追い込まれていた。
そんな世界の現状を嘆いた神は、世界を救うためにある存在を造った」

少し表情の堅い少女を見つめ、スッと目を細める。

「――それが、“聖奏の神子”」

少女の顔が、怪訝そうに歪む。

「……いつから、そう呼ばれていたんだ…？」

「…詳しいことは分かっていない。
――話を戻すぞ。…神は自身の血を媒体に、負を浄化させれる存在を造りその世界へと送った。
その存在――聖奏の神子のおかげで、世界は浄化され、戦争も終わり、平和が戻った。
それから長く平和が続いていたが、約七百年前、ある大事件が起こった」

サッと少女が青ざめる。

「…歴史上、最も大きく謎の多い事件と称えられている――“終焉”と呼ばれる事件が起きた。
終焉――…そう、この世界は一度滅びたのだ。

当時の記録によると……、突然聖奏の神子のもとに、長い黒髪の女――“深闇の魔女”が現れ、世界中に大量の負を放った。その負により、暗黒な闇が広がり、たった一日で世界は滅亡まで追い込まれた。なんとか魔女に対抗した神子だったが、魔女の力は甚大であったため、簡単に倒すことが出来なかった。
――そして、神子は最後の力を振り絞り、自分もろとも魔女を消し去った――…。しかし、魔女が消えた後も、世界中に蔓延した負は消えなかった。

そんな中、魔力の強いごく一部の者達だけが生き残り、支え合いながら生き延びた。

その事件の後、薄暗い廃墟と化した世界に一年の間雨が降り続いた。
――それは、この世界の現状を嘆き悲しんだ神が世界に蔓延する負を浄化するために流した涙で“神涙”と呼ばれた。
神涙のおかげで、長い間暗闇に包まれていた世界に日が射し、明るさを取り戻していった。

また神涙を流すと同時に、神は緑を育んでゆき、やがてそれは一つの大きな森となり、そこから世界中に緑が広がっていった。
その森は“始まりの森”と呼ばれ、その森からも浄化の力と癒しの力を持った光の粒が飛ばされ、世界の浄化に多いに貢献したと言わ

れている。
そして生き残った人々は、少しずつ人口を増やしていき、長い年月を経て以前のような世界を取り戻していった――…」

フゥ…と息を吐き、青年は少女を見つめた。

「――これが、この世界の歴史として伝わっている事実だ。
……何か質問は？」

ん？っと質問を促す青年だったが、少女は青年の言葉など耳に入っていなかった。

深闇の魔女……？
そいつが負を放ち、神子が倒した……？
それが、この世界の歴史――…？
何を…どういうことだ――…？
そんな事実…私は知らない。
そもそも負を放ったのは――…。

――胸が、ざわつく。頭に浮かんだ映像に、胸が苦しくなり思わず胸を押さえる。

そうだ、あれは――…。

「…おい。俺の話聞いてたか？」

下を向き、全く反応を示さない少女に、青年は少しいらつきながら声をかけた。
しかし、そこで少女の様子がおかしいことに気づく。
呼吸は荒く、尋常じゃないくらい汗をかいており、今にも倒れそうだった。

「おい…？どうした…！？」

突然変わった少女の様子に、青年は焦っていた。
先程の威圧的な様子と打って変わり、弱々しく今にも倒れそうな少女。

やべぇ……。俺、何か余計なことしたか……？

自分に原因が有ると考えた青年は、理由が分からずに狼狽していた。

「っ……、何とも…な、い…」

「何ともなくないだろ！！
―いいから、まだ休んどけ。……話はもう少し落ち着いてから聞く」

覇気のない声で反論する少女を、無理矢理ベットの中に押し込む。
この部屋を出るなよ、と再三繰り返し、まだ何か後ろで喚いているのが聞こえたが、それらを全てスルーして宿から出ていった。
…まぁ、万が一のことを考えて、魔具を使って部屋を密室にしておいたが。

「あら、そこのお兄さん！
これ安くしとくよ！買っていかない？」

「おお、じゃあ二つ貰おうかな」

「まいどあり！！
お兄さんかっこいいから、一つサービスしとくよ！」

「ありがとおばさん」

お姉さんでしょ！？という豪快な笑い声と共に聞こえた言葉に苦笑しつつ、サービスしてもらった果物をかじった。

「ん…うめぇな……」

噛んだ瞬間広がった水気で、喉を潤していく。
また一口かじり、ふぅ…と息をついた。

――脳裏に、華奢な少女の姿が浮かぶ。
始まりの森に封印されていた、少女。
その姿とは裏腹な威圧的な態度と言葉。
――そして、自らを“神子”と呼び、俺を人間と呼ぶ――…。

「……あぁー……、くそぅ…」

――頭が混乱する。

あの少女は、本当に神子なのか――…？
そんな馬鹿な、と思う半面、そうなのだろかという言葉が脳裏を掠める。
正直半信半疑なのだが、今までの過程を思い出してみると、その方がつじつまが合うのだ。

――しかし、仮に本当にあの少女が神子なのならば――…。
…自分は、とんでもない出来事に――それも、世界の歴史を塗り替えるような、そんな規模の出来事に、足を踏み入れてしまったのではないのか、と……。

「……とりあえず、必要最低限の物は、揃えておこう」

これからのことに鬱になっていく思考を奮い立たせて、そんな自分とは裏腹に、活気に満ちている町の中へと足を進めた。

覚醒　†青年の依頼　1†

何なんだ！？あの人間は！！
この私に――神子である私に、あのような無礼な態度。
そんなことをする人間なんて――…。

『――ほら、もっと食べないとっ！
これとかおいしそうだよ？』

――人間な…んて、…あの人くらいで……。

「――こっち……て……」

――っ！！？
人間の声――！？まさか、他にも――！？
ガタッ…。

「あっ……」

――視界に広がる、色。

煉瓦造りの町並み。その通りを、行き交う人々。
活気のある、人間の声……。

再び、動悸で苦しくなる。
激しく動く胸を押さえて、その場にうずくまる。
窓の外に広がっていた、あれは――…。

「…本当っ…に……」

『――約七百年前、ある大事件が起こった――』
『――魔力の強いごく一部の者達だけが生き残り、支え合いながら生き延びた――』
『――生き残った人々は、少しずつ人口を増やしていき、長い年月を経て以前のような世界を取り戻していった――』

「っ本当…に……」

僅かに熱を持った、雫が頬を伝っていった――…。

＊　＊　＊

「帰ったぞ～……て、おい。どうした？
まだなんかきついのか？」

ようやく終わった買い物の袋を片手に、少し怠そうな様子で青年は宿のドアを開けた。
やけに静かだな…と訝しんで部屋の奥を見れば、ベットの端で、綺麗な銀髪を垂らした少女がうずくまっていた。

少女は、開いたドアの音に一瞬こちらに目をやるが、すぐに興味を失せたように視線を元に戻す。

青年はその時に見えた少女の瞳が涙に濡れ、また光の灯らない瞳であったことに気付き、ハッと息を止める。
…が、何もなかったかのようにすぐに少女の下へと歩み寄った。

「これとこれ…、それとこれもか。
とりあえず必要最低限のものを買ってきたんだが、サイズはこれで大丈夫か？
…あぁ、デザインについては文句は言うなよ」

袋の中のものをベットに広げながら確認するように少女の方を向いた。
…が、少女はまるで何も聞いていないかの様子で、全く動かずうずくまっているままだった。
その様子に内心軽く息をつきながら、青年はズイッと右手を差し出

した。

「ほら、これそこの通りで買ってきたココの実だ。
ちょうど熟し時で美味いぞ。食ってみろ」

ほら、と更に顔に右手を近づけると、少女は少し殺気を込めた瞳で
こちらを射抜いた。

「黙れ、目障りだ。早く私の前から去れ」

「…と言われてもなぁ～…。
残念ながら、それは無理なお願いだな。
俺は君を王都まで連れて行かないといけないんだよな～」

「……何だと？
戯れ事もいい加減にしろ。何故私がお前について行かねばならん」

「何故って言われてもなぁ……」

う～ん…と目を逸らして躊躇するように口ごもる。
そして、覚悟を決めたように視線を戻した。

「実はさ、俺が君を見つけたのは、王都にある教会の神官長からの
依頼が原因だからなんだよね」

「依頼…？」

「そう。『始まりの森から発生されている力の正体を調べろ』っていうね。
ほら、あそこって強力な結界が張られているだろう？
何人も立ち入れない――だから、今までその実態が明らかにされていなかったんだ」

その言葉を聞き、少女は目を落とした。

“何人も立ち入れない結界”――その名の通り、生き物が通ることができない区域。
――そう、定めたのは私だ。……だから、私がここにいることは本来ありえないことなんだ。

「そこで、教会の者達は考えた――結界の条件は何なのか、と。
それを調べるために、いろいろな実験が行われた。そして、立てられた仮説が――“魔力を有する者”だった」

――そう。“魔力を有する者”……それが、条件だった。
しかし、魔力とはこの世界に存在する、生きとし生ける者全てが保有している、いわば生命力と同じもの。
だから、それは生き物に留まらず、植物、空気――もちろん、魔法も。
あらゆる全てのものを遮断する、鉄壁の結界なのだ。

「魔力を持たない者はいないからな……あの結界は、この世界では最強の結界だろう。
なんせ、破ることができる者がいるはずがないんだからな――――だが」

フッ……、と青年は自嘲めいた笑みを浮かべ、その端整な容貌を歪めた。

「だがな……、いたんだよ。
歴史上最初で最後であろう、その例外が――“魔力を有していない者”が。
……ここに、な」

薄く笑顔を浮かべているにもかかわらず、青年は何処か冷たく鋭い雰囲気を纏いながら、そう続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8164t/

Ｆａｔｅ～孤独な魂の旋律～

2011年9月1日02時35分発行